グループワークを行う研修をフルオンライン化するための諸ツールの検討

Selection of various tools for full online implementation of a course with group work

鈴木真保[*1], 合田美子[*1*2], 松葉龍一[*1*2], 鈴木克明[*1*2]
Maho SUZUKI[*1], Yoshiko GODA[*1*2], Ryuichi MATSUBA [*1*2], Katsuaki SUZUKI[*1*2]
熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻[*1]　熊本大学教授システム学研究センター[*2]
Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University[*1] Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University[*2]

＜あらまし＞熊本大学で毎年開催している公開講座「インストラクショナルデザイン入門編/応用編」をフルオンライン化した。「非同期オンライン＋同期対面型」講座から「非同期オンライン＋同期オンライン型」講座への移植である。本研究では、この中の同期オンライン部分について、検討した。受講者および講座提供者全員が個別に遠隔から参加し、グループワークを行う研修設計のため、受講者および講座提供者の円滑なコミュニケーションが求められる。こうした与件において、利用するツールの選定を行った。

＜キーワード＞グループワーク，オンライン化，オンライン会議システム，コミュニケーション

1. 背景

熊本大学では，公開講座「インストラクショナルデザイン入門編/応用編」を毎年開催している。本講座は「急に教える立場になって，どう教えてよいかわからない（中略）等，業界を問わず教育にお悩みの方」を対象にインストラクショナルデザインを教授する入門的な講座である。従前は、LMS（学習管理システム）の Moodle を用いた非同期型事前事後学習と，1 日の対面集合式の同期型研修を組み合わせて行われてきた。しかし，2020 年度はコロナウィルス感染防止の措置として，対面式の同期型部分においても，オンラインで実施することとなった。

対面式集合研修をそのまま同期オンライン型研修にしたのでは，教育の効果が低減してしまう。研修のゴールを再確認し，適切なツール選定，設計のもと，研修を行う必要がある。

本研究では，そのツール選定にフォーカスをあて，検討する。本講座は，もとよりインストラクショナルデザインの知見に基づき設計されており，対面式集合研修としては，インストラクショナルデザイン理論の観点から見て，おおむね妥当に設計されていたといえる。オンライン化に当たってのツール選定と組み込みの点にフォーカスして検討することが，効率的であると考えた。

2. 検討事項

2-1. 受講者像

想定される受講者像は，以下のとおり。インストラクショナルデザインを学びたいという意思を持っている。研修会社勤務，学校勤務等が想定されるが，IT の熟達度については想定が難しい。

2-2. 短期講座という特性

Moodle を利用しての事前学習や事後学習の期間が設定されているものの，同期型研修部分は 1 日完結型の超短期講座である。長期的視点においては，オンライン学習者としての能力として，新しい IT ツールに果敢にチャレンジするスキルも醸成することが望ましい。しかし本講座においては，その部分にリソースを裂くことは，受講者・講座提供者側両者にとって負荷が高く，効率的な研修の設計という面から，排除される。学習者がそうしたスキルを持ちあわせない場合であってもゴールに到達できるよう，講座提供者側が配慮し，準備することが求められる。

2-3. 講座設計上の特徴

本講座は，「e ラーニングでの事前事後学習，対面ワークショップを通じて，（中略）学習者を動機づけるための手法や，学びを支援するための働きかけに関する理論を事例ともに学び，みなさんのお悩みを解決する糸口をつかみます」とあるように，理論を実例とともに学び，受講者の実務上の悩みを解決する糸口を提供することをゴールに置いている。そのため，「言語情報」としてのインストラクショナルデザイン用語の暗記で

はなく，実例に応用できるという「知的技能」や，それを実務で活かしていこうという「態度」にまで範囲が広がっている。これを実現するために，事前準備として学習してきた内容をグループワークやアウトプットを通じて，スキルや態度に落とし込んでゆく。

2-4. 講師ら講座提供者側の状況

1日の同期型研修日には，複数のワークを行うという研修特性上，教授する内容の専門性が多岐にわたるため，複数名の講師が分担して担当する。また，全体をコントロールするための司会役やアシスタントも配置される。

例年このような人数配置で実施してきたが，本年は，コロナウィルス感染防止の対策を行わなければならず，受講者のみならず，講師ら講座提供者側も，可能な限り集合を避けることが求められた。そのため，複数名からなる講座提供者側講師・スタッフも，それぞれの職場・自宅等からオンライン参加することになった。

2-5. 検討事項を踏まえた機能与件

上記の検討事項から，①高度なITスキルを必要とせず，受講者が使い慣れている②ウェビナー等の一方通行なコミュニケーションにとどまらず，グループワーク等双方向性のコミュニケーションが可能である③不慣れな受講者をサポートするために講座提供者側も，対受講者・講座提供者内部の両方で円滑にコミュニケーションが取れるという要件が導き出された。

3. ツールの選定と対応

同期オンライン研修の配信ツールとしてオンライン会議システムのZoomを採用した。その他Remo，oViceも検討した。Remo，oViceはともに大部屋にテーブルが多数配置された会議室のようなインターフェースで，ウェブブラウザで利用できるオンライン会議ツールである。全員で講師の話を聞くレクチャー形式，テーブルでのグループディスカッションが可能になる。対面の教室のような臨場感・距離感が演出できることがメリットとして考えられた。

しかしながら，Remo，oViceはITスキルに自信がないユーザーにとって利用難易度が高いと予想された。Zoomは多くの教育機関等で導入されており，受講者の多くが利用したことがあると想定され，その点を重視して採用した。また，事前にZoom接続練習会も設定した。

グループワーク等の双方向性を実現する手段としてZoomのブレークアウトルーム機能を利用した。ブレークアウトルームは，会議室を小分割し，一時的に小グループ内のみでのコミュニケーションを可能にする機能である。講師に質問があるときの手順を教授しておくこと，受講者自らがどのグループに所属しているかが明確になるようにブレークアウトルーム名を付けること，作業指示ごとにブレークアウトルームを終了して指示を出しなおすこと，経過時間を逐次伝えること，という方略で，受講者が迷わずにワークに集中できるように設計した。なお，各ワーク用にGoogleドキュメントを準備した。グループごとに作成し，参加者全員に書き込み権限を付与した。ワーク中にこのドキュメントに書き込むことで，受講者はディスカッションをまとめられ，講師は，受講者の発表を待たずとも進捗を確認したり，フィードバックを与えたりできる。

こうした逐次の進捗確認やフィードバックのためには，講師・スタッフの密なコミュニケーションが必須となる。そのため，Facebook Messengerのグループスレッドを作成し，バックヤードコミュニケーションツールとして利用した。研修中に利用する各種資料は，Googleドライブに保存し，情報集約用のGoogleスプレッドシートに記載，スケジュール表とともに一覧できる形ですべての情報を集約した。Facebook Messengerでは，このスプレッドシートへのリンクも投稿しておき，講師・スタッフ全員が随時確認できるようにした。

4. 今後の方向性

同期オンラインでグループワークを行う研修において、コミュニケーションの円滑化が重要になる。今回の講座の結果を分析し、より効果的なコミュニケーションツールの選定・運用ができるように、検討を進める。

［参考文献］

公開講座「インストラクショナルデザイン入門編/応用編」
http://www.cps.kumamoto-u.ac.jp/syogaigakushu/koukai/id/ （最終確認2020年12月13日）
oVice https://ovice.in/ja/
Remo https://remo.co/
Zoom https://zoom.us/